研究課題名	大腿骨近位部骨折術後早期における Standing Test for Imbalance and Disequilibrium （SIDE）を用いた転倒予測：術後 1 年間のリスク評価に関する検討
試料・情報の利用目的・利用方法（他機関へ提供する場合その方法）	大腿（ふともも）の付け根の骨折は、年を重ねた方に多く見られる骨のもろさ（骨粗しょう症）による骨折です。この骨折をすると、歩く力や身の回りのことをする力が大きく落ちてしまい、介護が必要になるきっかけになることもあります。また、一度この骨折をすると、再び骨折する可能性が高くなるため、最初の骨折の後に「二度目の骨折」を防ぐことがとても大切です。この骨折の多くは「転ぶこと」が原因で起こるため、手術のあと早い時期から、転びやすさ（転倒リスク）を評価して、必要に応じて対策をとることが再発予防につながります。私たちは、手術後 7 日目に、片足立ちテストや「SIDE（サイド）テスト」という体のバランスを見る検査を使って、転びやすさを調べました。これまでの調査では、片足立ちが難しい方もいる中で、SIDE テストは多くの方に使うことができる、役に立つ検査だということがわかっています。ただし、手術直後に行う SIDE テストの結果が、1 年後の転倒や歩く力の変化とどのようにつながっているのかは、まだよくわかっていません。この研究では、手術後早い段階で行う転倒リスクの評価（特に SIDE テスト）が、その後の転倒や歩く力の変化に関係しているかを調べることを目的としています。これが明らかになれば、将来の骨折を防ぐために、より早く・的確な対策を取る手助けになると考えています。
研究対象者	2019 年 11 月以降にベルランド総合病院整形外科に大腿骨近位部骨折を受傷して入院し、下記の適格基準に該当した方 1）年齢が 50 歳以上、2）手術加療を受けた、3）受傷原因が転倒、4）受傷前に歩行が可能、5）反対側の大腿骨近位部に骨折歴がない、6）本転倒により椎体、骨盤、下肢の他部位に外傷がない、7）認知機能の低下が認められない（改訂長谷川式簡易知能評価（HDS-R）にて 21 点以上）
利用又は提供する試料・情報の項目	診療の過程で得られた下記項目を本研究に使用させてください。 年齢、性別、術後 7 日目に測定した転倒リスク評価（SIDE、握力）、過去 1 年間の転倒歴、術後 1 年間の転倒の有無、術後 1 年経過時の歩行状態、認知機能（HDS-R）
研究予定期間	機関の長の実施許可日　～　　2025 年　6 月　15 日
試料・情報の取得方法	通常診療の過程で得られます
試料・情報を利用する者の範囲	この研究はベルランド総合病院理学療法室のみで行います
試料・情報の管理について責任を有する者の氏名又は機関の名称	ベルランド総合病院 理学療法室　　田中暢一
研究に協力したくない場合	研究への試料・情報の利用についてご同意いただけない場合は下記お問い合わせ先までお申し出ください。不同意の場合でも診療に不利益になることはございません。
利益相反について	本研究に関連し開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。
お問合せ先	ベルランド総合病院　　理学療法室 氏名：田中 暢一 メールアドレス：nob_tanaka@seichokai.or.jp 〒599-8247　堺市中区東山 500-3　　℡：072-234-2001（代）